

ルドルフ・シュタイナーによって明かされた靈的觀点における空間と無限

基礎的知識なしに、漫然と芸術活動を拡大することは出来ない。とりわけ構築的、技術的な知識を含んでいる建築芸術ではなおさらである。しかし、建築作品を芸術作品にするのは、知識でも認識そのものでもない。どのような数学的幾何学的な内容も、それ自体を超えてゆくものでない限り、芸術的な形成にとって意味を持たない。思考や概念に頼ることでは超えることの出来ない限界へと、科学的認識自体の法則から抜け出して尊くことこそ、ルドルフ・シュタイナーにとって最大の関心事だった。

数学的な思考原理は、全ての主觀性の極端な排除にこそ、人文学的認識にとって価値があるようにしばしば見られている。しかし、そのことで被る重大な損失に対して、得られるものはわずかだ。数学的な使命の増大は、サイバネティカーが「アーカイブ思考」と呼ぶ知性的一面をとりわけ要求する。我々の文明のこうした進歩は、時代病である統合失調症の絶え間ない増加と無関係ではない。文化的な作品の中に現われる人間の力を問題にするのであれば、客觀性というものはそれが個人に印象を残す限りにおいて意味をもつ。ルドルフ・シュタイナーの関心事は、主觀を排除することではなく、それを変容させるような靈魂的活動を活性化することだった。まさに、空間藝術に係わる彫刻家や建築家にとって、その作品の中で幾何学的空间を乗越えることが重要なのだ。人間の手になる物体が藝術的なフォルムとなるのは、非空間の影響がみられるときだ。彫刻的なフォルムの誕生に必要な領域は時空の外にある、という事をゲーテは知っていた。ファウストは、ヘレナの本質を目に見えるようにするために、道なき道へと入り込んだ。すべての「形成、変形・・・」の原像は「母たちの」元にある：「そこには、空間も、ましてや時間もない・・・」。非空間の中に、空間藝術の秘密の源泉がある。

ルドルフ・シュタイナーは、1872年ウィーン工科大学で学び始めた頃、空間というものを「全方位的に向けて無限に続く空虚として…見渡すことのできない形で考え」させようとする当時主流だったあたり方に苦しんでいたとその自伝の中で述べている。「新しい（綜合）幾何学の到来によって…、右方向に無限に延びる直線が、再び左からその出発点へと戻ってくるという捉え方が私の心に迫った。（…）新しい幾何学のこうした考え方によって、空虚の内に凝固していた空間を理解して捉えることが出来るよう思えた」。空間を一つの全体として把握するために必要な、とりわけ造形的に活動する人々の注目を引くだろうとルドルフ・シュタイナーは繰り返し強調して示唆した—それは、空間から区別され、空間性を包含し、それを創造し、飲み込む現実性に気づくことにより、一望にすることによってのみ空間を把握することができるという洞察だ。—この考え方こそ、ルドルフ・シュタイナーが、自然の探究と藝術に携わる人々を空間の境界へと本当に導いてくれるものとして、その10年後に一度だけ喚起したものだ。この考えは、通常の思考にとって慣れない二つの大きな概念である段階的な空間の消失と、空間から非空間へ、非空間から空間への折り返し、反転(Umstuelung)に関連している。

1920年3月7日（ルドルフ・シュタイナーによる第二回自然科学講座の第7講演の中で）人類の歴史において、初めて多面体結晶フォルムの反転(Umstuelung)について語られた。それは個体から流動体へ、ガス状へという物質の状態の移行をリアルに把握することと関連したものだった。固体状態の特徴である「形を有する(Gestalthaben)」結晶フォルムは、一体化する球フォルムによって「虚形態(Negativgestalt)」の概念へと向かい、形態的なものが消失したガス形態へと導かれる：「もしここで流動性からガスへとさらに進めば、今度は外へ向かう球フォルムの解消として崩壊が生じます。ここで、少々難解な概念と出会うことになります：正四面体のような簡単なフォルムを想像して下さい。この正

四面体を、手袋を脱ぐようにひっくり返すとします。その全体をひっくり返そうとすると、一旦、球のフォルムを通過しなくてはならない、という事に気づくでしょう。そして、虚体が現れることにも気づくでしょう。…この虚体こそが、残りの全ての空間を埋め尽くしていると思い浮かべて下さい。…そして、この（虚体によって：訳者）埋め尽くされた空間の中に、正四面体の穴があるのです…ポジの正四面体からネガの正四面体へと、移行する間の状態が、球なのです。すべての多面体は、ゼロポイント、ゼロポイント圏を通るように、球を通して、その虚体へ移行するのです。」

対応する空間幾何学理論がまだ知られていなかったにもかかわらず、ルドルフ・シュタイナーは多面体の反転を靈的観点から最も本質的なものへと向かって即物的に叙述した。反転の靈的な概念からその空間幾何学的な表明がなされたことで、空間と無限の靈的な観点へと私達を連れ戻してくれる。無限とは何であるのか？どこにあるのか？という問い合わせに対して、反転というものが通常にはない強さで答えてくれるからなのだ。我々が観察している反転する立方体では、無限はどのように現れているだろう？何度も観察してきた「直交する八つの面」、もしくは「空間的八面体」が、全ての動きの状態で一つの球を規定することを思い出そう。（図2）

この通信の第五年第一号に、反転する立方体における立方体から角柱へと向かう様々な状態が描かれている（図1）。厳密に言えば、そこに見られるものは内部から外部へ、もしくは外部から内部へと変換する反転ではない。反転は、角柱の水平な辺が平行になる直前の「展開する極」が、平行になった直後、新たに「退行する極」へと移行する無限に短い瞬間にだけ起こる。この無限性が上下の間で入れ替わるのは、「退行する極」が面を貫通することと関係している。この瞬間までまだ内側に向かって凹面に見える角度を持つ「退行する極」は、次の瞬間には、それまで内部だった面を今度は凸型となった外皮をもつ新たに発展する極となったのだ。—「人間と建築藝術」第五年第三号で、無限を通じて四度貫通する形態の様子が、16地点からなる一連の図で描かれている（図3）—厳密には、多面体の変容変異全体の中で、数学的な表現に習えば、4においてだけ無限に短い瞬間に一つの反転が起こる、と言わなくてはならない。その経過とは、つまりこうしたものだ：六面体が長く伸び、三辺からなるオベリスクのような骨格を得る。この形態は、次第に大きくなつて行く球に内包される。しかし、この拡大は単純なボリュームの増大と比較できるものではない。それは、拡張するものと縮小するものという二つの組み合せからなっている。拡張するものは、角柱に近づくピラミッドの「発展の極」であり、縮小するものは面に近づくピラミッドの「退行の極」だ。退行し縮小する立方体のピラミッドは、相対的な速度を次第に緩め、面を貫通する瞬間に停止する。これに対して、発展し拡張するピラミッドは、その相対的な速度を無限に速めてゆく。

こうして、八面体は四度、数学者の言い方によれば三角柱へと「変性」する。つまり、六面体を包含する球が、四度、無限の大きさになる。言い方を変えれば、この立体が一度反転する間に、その八つの角は、四度、想像を超えた領域を通過する。「無限を通して」八つの角（発展の極）が通ると同時に、退行の極であるピラミッドとしての姿も消失する。どんどん平らになり、その頂点は正三角形の中心点になる。つまり、「発展の極」のピラミッドがどんどん延びて行くのと同時に、幾何学的な消失プロセスが現れる。こうして、わたしたちは反転の変容変異を理解する中で、立体性の消失による平面の誕生に至る。なぜなら「発展の極」が無限を通る瞬間には、（「退行の極」では）空間的な六面体として、もはや正三角形しか存在しないからだ。包含する球は、この正三角形が載る平面となつたのだ。この球の中心は、今言ったように無限遠にある。この面をなしている両面は、両方とも一つの球の内側となつた。

この球は外部を持たない。この面は、中心を無限遠に持つ一つの球だ。平面内の正三角形は、三次元内の立方体であるものと同じものだ。三角柱は、その中で空間が三次元的な現実として自らを吐き出す形態だ。立体的な六面体が溶け込んでしまった立方体反転のゼロポイント領域であるこの平面を説明するのに、ルドルフ・シュタイナーが第三回自然科学講座の第15講演（1921年1月15日）で語った次の言葉ほど正確なものはない：「二つの次元しかないのは、第三の次元がなかったからではありません。そうではなく、存在していた第三のものが再び消え去った、というのがその理由なのです。二つの次元は、第三の次元が最初に生成し、そして、消え去った結果なのです。それは、二つの次元のように見えるだけで、ポジティブとネガティブという二つの「第三の次元」を示している、と内的には考えざるを得ない空間なのです。ネガティブな次元は、この三次元空間の中には存在しないところからやって来るのです。」無限に大きな球の中心点が、無限遠、つまり、想像を超えたところにあるということは、この中心点は、空間外の靈的な存在を持っている、ということを言いかえただけにすぎない。－この球の「無限に遠い中心点」というものは、どの方向だろうが、それを探したとしても、私たちの思考力では捉えられないもののように考えがちだ。そしてこの球－平面がもつ排他的な（auschliesslich）内側は、最早、場所を特定できない中心に向かって開いている、ということに誰もが同意するだろう。それでも、先に述べた平面上の本来の六面体ではない三角形の誕生については、我々の意識の力で完全に理解することが出来ると考えるかもしれない。しかし、それは思い違いだ。空間的な形態が平面の中に消えるという事は、自然のこれに類した変化同様に、理解すること概念的に思考をすることが難しい事なのだ：例えば、一片の雪の結晶が温かい手の上に落ちると、たった一瞬幾何学形態を見せただけで、たちどころに一粒の水滴に変わってしまうようなことなのだ。私たちがこうした変化としてみるものは、はるかに意味深い、目に見えない、想像を超え、信じられないようなプロセスのただひとつの現われにすぎないのだ。もはや、空間的に場所を持たない中心点と神秘的に符号するこの平面の誕生も、同じように手の届かないところにあるのだ。

1922年12月17日の講演で、ルドルフ・シュタイナーが「空間知の靈化」と名付けた我々の時代の課題は、自然認識に対するのと同様の意義を芸術に対しても持っている。自らを超えてゆくマテーシスは、体験的な空間の中で私たちを概念的な思考の鎖から解き放ち、自由にしてくれる。この自由こそ、我々の時代に相応しい建築様式と、新しい彫刻作品の前提でもあるのだ。それは、古い様式の焼き直しでもなければ、無意味な記念碑以上のものだ。すべての芸術形態に内在するものは「無限」における反転の靈的現実なのだ。ルドルフ・シュタイナーがかつて語ったように、彫刻家の創造は「抑圧されたイマジネーション」からやって来る。それは非空間からやって来て、同時にフォルムを加える衝動を与える。本当の芸術作品は、すべて内的魂的体験を外部に向かう感覚的現象へともたらしたものだ。作品を生み出す際の二種類の速度を決定するこれ以上詳しい観察はないだろう。創造的な「射出（Wurf）」と呼ばれる本来の芸術的なデザイン（Entwurf）は瞬間的な速さで現象する。しかし、フォルムが完成するまでには、深い慎重さと落ち着きが必要だ。弛緩のひらめきのテンポと息を止める収縮の間の反転の中に、確認できる不思議な一致を、作品の創作（Erfinden）<原発見（Urfinden）>と製作の間の関係にも見ることが出来る。幾何学にとって「本来でないもの」は、イマジネーションにとって本来のものなのだ。芸術フォルムの創造においてその影響に触れることで、概念的には空虚のままもの、段階的に消失した空間とその再生をフォルムを模索する中で実現することが出来る。

ルドルフ・シュタイナーは、新しい幾何学という概念を使っていた。なぜなら、それによってイマジ

ネーションへと前進することが出来ると思われるからだ。「思考がさらに洗練され、…空間から出る必要が生じたなら—イマジネーションへ入り込むことは、それほど難しい事ではないでしょう。それはただ、内的魂的な勇気の問題に過ぎません。」（1921年1月18日の第三自然科学講座の終りに行われたルドルフ・シュタイナーによる質疑応答より）。

目に見える形、想像できる形で現れる反転は、「動きの言語」のためにフォルムを感じ、感覚的に受け取りながら対応する靈魂的な法則を探るための、単なる刺激に過ぎないことが明らかになるだろう。裏返した手袋の例を考えてみよう：裏地が外に、外側が内になっている。この最もシンプルな反転の例の中にも、ある法則を見ることが出来る—その靈的な重みを持って—生成の深い秘密が現れている。例えば、右手の手袋を裏返したものは最早右手にはめることができない。反転は、左右を取替る。

空間幾何学的な反転のとりわけ本質的な法則とは、非空間からの編入(Iinkorporation)は、非空間への転出(Exkorparation)の間接的な続き、もしくは結果を表しているということだ。反転したフォルムが、再び元の状態に戻るまでに空間のゼロ領域を四度通過する、という意味でそれは間接的なのだ。この変容法則に靈的に近づくためには、魂のより深い層において断念と言ったものの結果や、果実と同一視できるような体験を思い出す必要がある。ルドルフ・シュタイナーが「真実の観点からの発展」の連続講演で述べているように、人類進化の偉大な内容は四つの段階となっている。犠牲、与える徳、断念、愛として、ルドルフ・シュタイナーはこの偉大な生成過程を性格づけている。これらは、全体として見れば一つの反転である。あるフォルムを外的に感じ取り、内的な体験にフォルムを与えて再び外部に刻印することで、我々の時代の精神から生まれようとする建築の中心課題：メタモルフォーゼの秘密に近づくこととなる。

ポール シャツ／有機的・力動的な空間意識のための研究／2013年ゲーテアヌム出版 より
“Paul Schatz - Der Raum und das Unendliche in der durch Rudolf Steiner erschlossenen spirituellen Sicht” Architektur und Umstaelung – Studien zum organisch-dynamischen Raumbewusstsein / 2013 Velag am Goetheanum

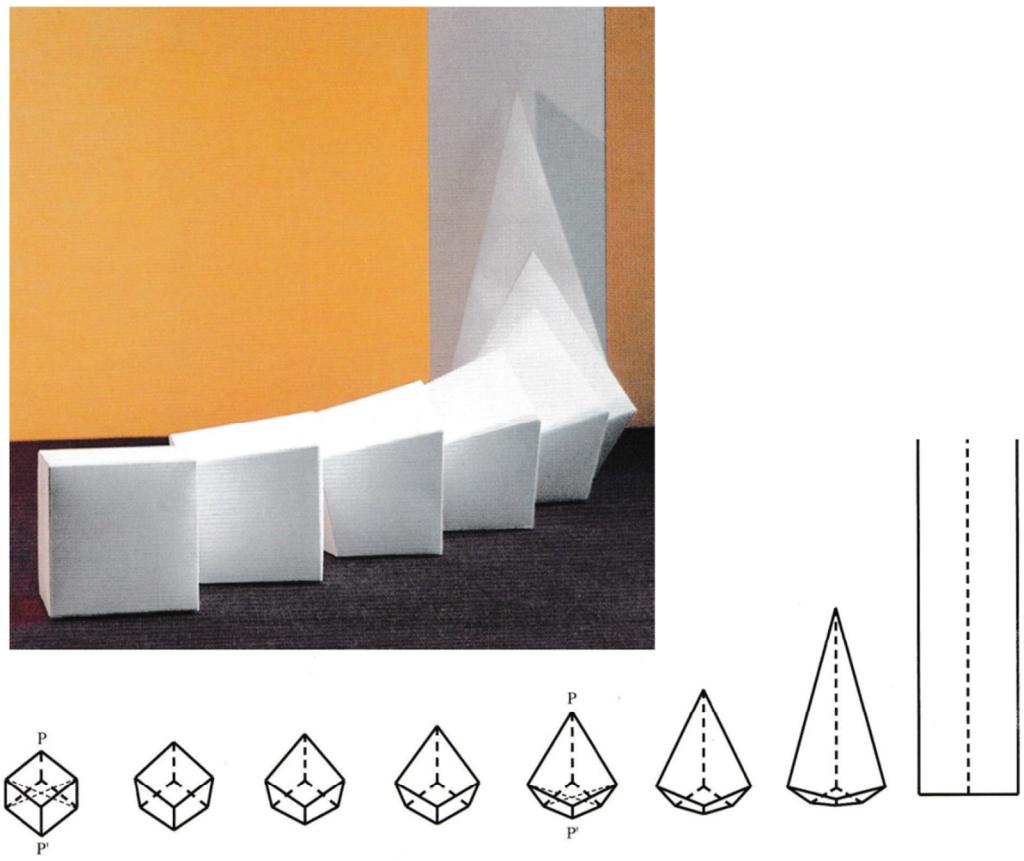


図 1

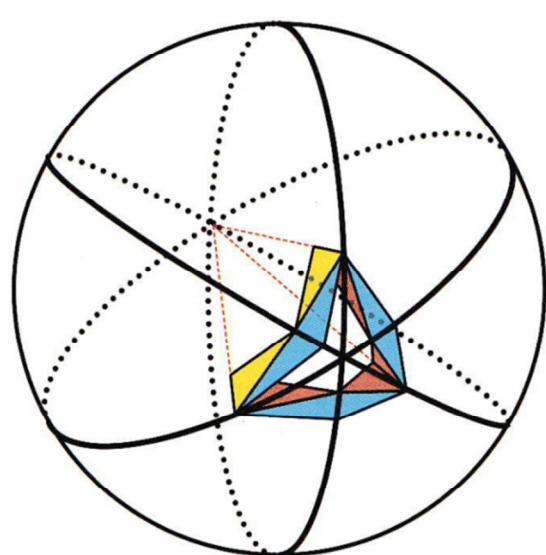


図 2

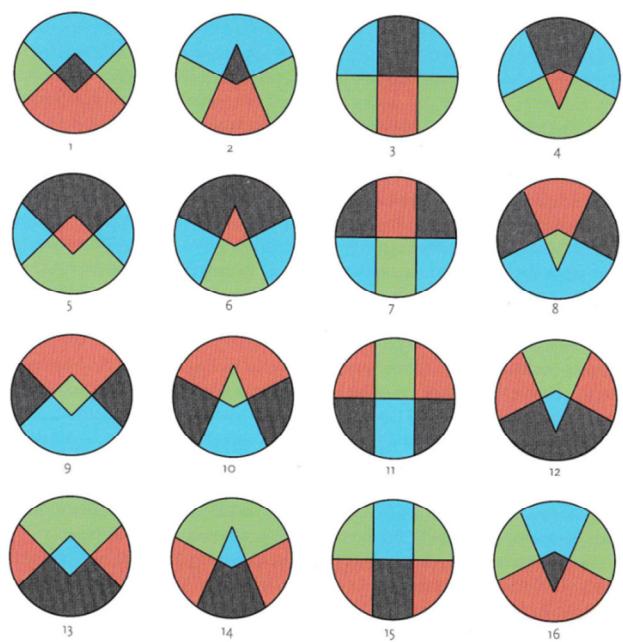


図 3